

NIEニュース

エヌ・アイ・イー



Newspaper in Education

第103号
2024.2.15

●特集・学校図書館から広がる新聞活用▶1~3 ●第14回「いっしょに読もう！新聞コンクール」表彰式▶4~5
●新聞の「今」——体験者なき時代の戦争報道▶6 ●アドバイザー紹介／フラッシュニュース▶7 ●〈NIEで
いきいき〉〈NIEあれこれ〉▶8

©2024年 日本新聞協会

編集・発行 一般社団法人 日本新聞協会 TEL: 03-3591-4410 (NIE担当) FAX: 03-3592-6577 e-mail: nie@pressnet.or.jp

〒100-8543 東京都千代田区内幸町 2-2-1 日本プレスセンタービル

[https://nie.jp] [https://www.facebook.com/Nie47]

特集

学校図書館から広がる新聞活用

情報活用能力の育成を重視する学習指導要領の下、学校図書館の役割が注目されている。巻頭では、新聞配備の現状と見直し、期待される学校図書館のあり方を確認するとともに、小中学校の実践事例を通じて、学校図書館が果たすべき役割を探った。

学校図書館は、学校教育において欠くことのできない基礎的な設備であり、次の三つの役割を担う。

1. 「読書センター」
児童生徒の読書活動や読書指導の場
 2. 「学習センター」
児童生徒の学習活動を支援したり、授業の内容を豊かにしてその理解を深めたりする
 3. 「情報センター」
児童生徒・教職員の情報ニーズへの対応や、児童生徒の情報収集・選択・活用能力を育む
- そのため、文部科学省では、令和4（2022）年1月に、第



文部科学省
総合教育政策局
地域学習推進課課長
高木 秀人

6次「学校図書館図書整備等5か年計画」（以下「第6次計画」という）を策定し、令和4年度から5年間で、全ての公立小中学校等において学校図書館図書

標準の達成を目指すとともに、計画的な図書の更新、新聞の複数紙配備、学校司書の配置拡充を図るべく、次の地方財政措置が講じられている。

- ・単年度 480億円
- ・5か年総額 2400億円

新聞読める環境整備が重要

特に新聞は、学習指導要領において、教材として活用することが位置づけられている。新聞を教育に活用することは、児童生徒が現実社会の諸課題について多面的・多角的に考察し、公正に判断する力等を身につけるために必要なものである。

また、平成27（2015）年6月の公職選挙法等の改正による選挙権年齢の18歳以上への引き下げや、令和4年度からの民法に規定する成年年齢の18歳への引き下げに伴い、児童生徒が主体的に主権者として必要な資質・能力を身につけること等が一層重要になった。

学校図書館資料として複数の新聞を配備し、児童生徒が自由に利用できる環境を整備することは極めて重要である。

そのため、平成24（2012）年に策定された第4次計画から、新聞の配備に地方財政措置が講じられることとなった。第6次計画では、小学校等に2紙、中学校等に3紙、高等学校等に5紙の配備を目標とし、次の地方財政措置が講じられている。

- ・単年度 38億円
- ・5か年総額 190億円

配備される新聞については、発達段階、地域や学校の実情に応じ、全国紙・地方紙のほか、

小学生新聞、中学生新聞、専門紙、英字新聞などが想定される。東京都葛飾区では、教育委員会が新聞社との一括契約により複数配備をしており、配備には様々な工夫が考えられる。

平成27年から令和元（2019）年にかけて、新聞配備校の割合や平均新聞配備数は増加しており（図）、新聞を活用した学習を行うための環境が改善されてきている。



図 新聞配備校の割合

地方財政措置は、使途を特定しない一般財源として措置されており、各地方公共団体において予算化が図られることによつて、はじめて新聞の購入費に充てられる。文部科学省としては、各地方公共団体において適切な予算措置が講じられるよう、引き続き、計画等の周知、関連調査の実施・情報提供等に努めてまいります。

センター機能を図書館に



静岡県立麻機小学校
前静岡市立中島小学校
教諭
伊東 一磨

前任校である静岡市立中島小学校では、「新聞に親しみ、考えを広げるNIE」をテーマに設定し、2021年度から2年間、研究実践に取り組んだ。

子供が新聞に親しむために必要なこととして、新聞学習の環境整備にまず着手した。

NIE担当者が司書教諭を兼務していたため、学校司書と連携し、新聞に関わるセンターの機能を学校図書館に集中させることとした。

これにより学校図書館とNIEが相互に作用し、より効果的な学習支援につながる環境づくりができたと考える。主な取り組みを報告する。

①新聞の管理を一元化

図書委員会が毎日、朝刊を配架したり、バックナンバーを管

理したりすることとした。図書館内のNIEコーナーでは、各社その日の1面記事を一目で見えるように工夫して新聞を配置し、子供が目を通しやすく、手に取りやすくする環境づくりを心掛けた。

②新聞を活用した掲示物

所蔵する書籍や図書館にまつわる記事を活用し、館内掲示や特設コーナーの設置に取り組んだ。例えば、静岡県出身の絵本作家・宮西達也さんの記事が掲載された際には、特設コーナーを設け、記事とともに宮西さんの書籍、同時期に行われていた美術館展示の広告を掲示した。

また、東京オリンピックやサッカーワールドカップなど、大きなスポーツの国際大会が開催された際には、時事的なニュースコーナーも設置し、子供に興味を持たせるようにした。

このほか、「子育て」「読み聞かせ」といったテーマの掲示をした。

③テーマごとの記事ファイル

「SDGs」「教育」「小学生」「工業」「スポーツ」「環境」などのテーマごとに記事を切り抜いてファイリングし、学校図書館に常設した。子供の調べ学習や、社会科などの授業でも活用できるようにした。

記事を分類する中で、新型コロナウイルスをはじめとする健康・医療、事故、けが、メンタルヘルスなどに関わる記事は保

健室、グルメや食事、栄養、給食などに関わる記事は給食配膳室に掲示した。各担当教諭や委員会など横断的に協力を依頼し、学校中に当たり前に新聞記事を活用した掲示物がある環境をつくることのできた。

④新聞販売店との連携
22年度から、新聞販売店の関連組織に協力してもらい、季節や時期に合わせた掲示物を作成したり、低学年学級向けに子供

記事と関連図書で相乗効果



札幌市立栄町中学校
学校司書
児玉 優子

新聞は、日々発行される速報性のある媒体で、学校図書館資料の一つとして欠かせない。家庭で新聞を読む機会が減っている今、学校で新聞を読める環境を整備することは重要だと考える。

本校では、生徒や教職員が目

新聞を配架したりして、図書館のNIEコーナーのさらなる充実を図った。そのため、図書館で掲示物や新聞に目を通す子供が目に見えて増えた。子供が新聞に親しむ一助になったと認識している。以上のように、学校図書館はNIEの充実に中心的な役割を果たした。

学校図書館や新聞は学びを支える大切なツールであることを再認識することができた。

新聞は、掲示する場所や枠を作っておけば情報の更新がしやすい資料である。少しの工夫と手間でも、さまざまな相乗効果が期待できる。

展示資料としての魅力

新聞は、内容が一目で分かる見出し、コンパクトにまとめられた記事、目を引く写真や図解など、展示資料として十分な魅力がある。新聞記事に簡単なコメント（「考えてみよう」「どう思う？」など）を付けたり、説明や図で内容を補足した

特集 学校図書館から広がる新聞活用

り、「教科名」「SDGs」「札幌」というような学校での学びやテーマと関連付けたりすることで、生徒が自分事として読むことができるようである。

また、生徒に読ませたい記事は、できるだけ図書と組み合わせせて展示する。記事のみを掲示するより注目度や読む意欲が増

すほか、図書にも手が伸び、借りられていくことが多い。

読み比べて理解サポート

新聞記事をしつかり読ませるために、学校図書館前の掲示板で「読めば必ず解ける！新聞クイズ」を週替わりで提供している。一問一答、三択、穴埋めな

どさまざまな形式で問題を作成し、記事と一緒に掲示する。休み時間や放課後に、答えがしるゲーム感覚で友だちと問題を解き合っている姿がよく見られている。

また、「新聞は比べてみるとおもしろい！」と題し、一面比べや社説比べを随時行っている。

新聞の構成や社説の説明、比較のポイントを簡単に示し、生徒の理解をサポートする。最近では、大谷翔平選手の移籍に関する社説比べを行った。

今年度から新聞記事データベースが導入され、生徒はタブレットから新聞にアクセスしやすくなった。とはいえ、紙の新聞

のような一覧性はなく、どんな記事がどのように扱われているかを知らない生徒も多い。デジタルと紙の特性を踏まえ、多様な図書資料とコラボレーションできる強みを生かして、生徒の学びや興味関心を広げる新聞の提供をさらに深化させていきたいと考えている。

社会科連携「朝ニュースの日」



青翔開智中学校・高等学校
学校司書
横井 麻衣子

鳥取市にある本校は「探究」を建学の精神の一つに掲げる私立中高一貫校である。「図書館の中に学校がある」という設計コンセプトのもと、校舎中央に学校図書館の資料と機能が集まる「ラーニングセンター」という空間があり、教室や職員室とシームレスにつながっている。この環境を生かし、学校図書館は学びのハブ（接続地点）とな

るべく、各教科の授業と連携して探究学習を推進している。

全校で毎朝10分間「朝読書」の時間があり、中学3年生以上の学年は週に1日を「朝ニュースの日」としている。正規の授業時間以外の場で新聞を活用する短時間の活動（いわゆる「NIEタイム」）で、本校では学校図書館と社会科が連携してこの取り組みを推進することで学校全体におけるNIEの土台作りを行っている。また、複数社の新聞記事データベースや、NewsPicks等のソーシャル型ニュースメディアを併用して学びのD

X（デジタルトランスフォーメーション）化を図っている。

「朝ニュースの日」の実施内容

容は毎週異なり、たとえば年度始めは「新聞記事データベースを活用して記事検索のコツを学ぶ」、秋には「新聞記事の内容をヒントに『ニュース検定』の練習問題に挑戦する」、年末には「新聞社が挙げるその年の主要なニュースを読み、自分が注目した記事についてクラスメイトと意見交換する」など、生徒の実態と社会的な状況をふまえた内容を学年別で実施している。ときにはこの「朝ニュースの日」を現代文・地理・道徳等の各教科の授業と連動させ、授業テーマに関連する一つの記事

をクラス全員で読み合う。

学校図書館が授業を支援

学校図書館は、定期的に社会科と打ち合わせを重ねながら協働して「朝ニュースの日」の年間実施計画を立てている。また時期によっては、各教科の求めに応じて授業のねらいに沿った新聞記事を選定し提供する。週に1度のわずか10分間でも、年間で積み上げれば多忙な中高生が時事や新聞に触れる貴重な機会になる。この活動を土台として、正規の授業時間の中ではさらに深い記事の分析や比較読みを行っている。

NIEを学校全体に浸透させるには、複数紙配備・データベ

ース導入等の物的整備とともに人的整備が欠かせない。特定の教科にとらわれず、教育課程全体を見通しながら各教科の取り組みをつなぎ、授業支援を行う司書教諭・学校司書に期待される役割は大きい。多様な情報源を体系的に収集・管理している学校図書館がNIE推進に関われば、新聞記事を起点にしながら、語句を調べるための辞書・辞典類や記事に関連した書籍等、さまざまな資料を教材として組み合わせ、授業のために提供することができる。2024年度からは鳥取県NIE実践指定校（予定）としてさらなる新聞の活用を進め、生徒の学びを広げ深めていきたいと考えている。

第14回

いっしょに読もう！新聞

コンクール
表彰式

第14回「いっしょに読もう！新聞コンクール」の表彰式が2023年12月16日、横浜市のニュースパーク（日本新聞博物館）で開かれ、小・中・高校各部門の最優秀賞の受賞者に賞状と盾が贈られた。受賞者はそれぞれが選んだ記事を執筆した記者と懇談し、記事に込められた思いに触れた。

今回は47都道府県と海外から作品が寄せられ、応募総数は計5万9248編（小学生5382編、中学生2万4775編、

高校・高等専門学校生2万9091編）となった。1次、2次、最終審査会を経て、最優秀賞を校種別に各1編、優秀賞各10編、奨励賞計120編を選んだ。また、団体応募503校の中から



最優秀賞受賞者と審査委員ら

優秀学校賞を校種別に各5校の計15校、学校奨励賞を177校選定した。

表彰式の冒頭、新聞協会NIE委員会の佐伯聡士委員長（読売新聞東京本社取締役調査研究本部長）は主催者あいさつで、「コンクールに継続的に取り組む学校が増え、児童・生徒の書く力や学力向上につながっているとの声を数多くいただいている。皆さんが新聞を手に取り、社会の様々な出来事に関心を持つてもらえたことは、新聞の作り手の一人として大変うれ

しい」と述べた。また「他者との対話を通じて、自分にできることを考えたり、違う立場の人を思いやって尊重したりすることが大切だ。新聞に載っている様々な社会問題には、解決が難

しい課題もあるが、新聞記事を読んで考えたことを周りの人と共有し、若い感性で新しい社会を築いていってほしい」とエールを送った。

文部科学省初等中等教育局の大滝一登視学官は来賓として祝辞を述べ、「学習指導要領にも新聞の活用が明記されている。

このコンクールは、卓越した文章で書かれた新鮮な記事に触れ、誰かと対話することに意義がある。受賞作はどれも対話から気づきを得て、問題提起をしたり、解決策を考えたりして自分の考えを深めており、素晴らしい」と話した。

小原友行審査委員長（日本NIE学会顧問、福山大学教授）は講評で、今年度のキーワードとして①ポストコロナ時代、②人への優しさ、③切り抜き保存したくなる記事との出会い——を挙げた。教師も子供も悩み、苦しんだコロナ禍での学びの経

験を生かすポストコロナ時代にあって「選んだ記事に対する意見を仲間や家族と共有し、もう一人の自分と対話しながら、より深く学んでいくという普遍的で大切な学びが、このコンクールで体现できることを再認識した」と述べた。数々の作品を読み進めて一人一人の『優しさ』を感じたとして、「新聞を読んでも他者の気持ちに触れることで、人に優しくできる」と話した。

また、新聞を読み、切り抜いて生涯大切に保存したくなる記事として、20年前に自身が出合った『千と千尋の神隠し』に関する記事を紹介。「主人公の女の子が両親を助けるという目標を持った時、彼女の生きる力が取り戻される。すなわち夢や希望

など、目標を持って子供は頑張れるというメッセージが込められていると記事にあった。受賞者の皆さんが大切な記事に出合ったことは終着駅ではない。コンクールを出発点に仲間とともにNIEに取り組み、対話を通して地域や社会をよりよいものにしてほしい」と呼び掛けた。



高田さん（左）と平井記者

相互理解の大切さに気づく

広島県の安田学園安田小学校5年、高田彩葉さん（小学生部門・最優秀賞）は、子供の遊び声に対する苦情をきっかけに公園が廃止になったことを記事で知り、驚いた。自分の声も騒音になっていくのではと不安になった。遊び声をめぐって様々な受け止めをする人がいることに気づき、異なる立場や考え方の人たちとのコミュニケーションや、相互理解の大切さについて考えを深めた。

記事を執筆した朝日新聞社の平井恵美記者（東京本社くらし報道部）との対談で高田さんは、記事を読んでから近所の人にあ

いさつするようになるなど、行動が変化したと語った。高田さんから分かりやすい記事の書き方について聞かれた平井記者は「難しい言葉は使わず、なるべく簡単な言葉に置き換えている。専門用語をそのまま書くのではなく、頭の中でかみ砕いて分かりやすく伝えられないかを常に考えている」と答えた。

風評被害防ぐ行動を提言

東京都の恵泉女学園中学校3年、大作知穂^{おおくほ}さんは、福島第一原発の処理水海洋放出を前に、地元漁師たちが落胆しているとの記事を目にし、海の恵みを受ける一人の人間として胸を痛めた。父との会話を通じ、漁師、消費者、政府、それぞれの立場や思いがあり、自分が漁師の視点でしか考えていなかったと気づき、風評被害を生み出すか否かは消費者の行動次第であるとの考えに至った。「自分には関係ない」と思いがちな問題に正面から向き合い、根拠のないうわさを信じたり、ネット上で広めたりしないなど、自分たちに

できることを提言した。

朝日新聞社の西堀^{さいほり}岳路記者（いわき支局長）との対談で、記事を選んだ理由を聞かれた大作さんは、自分の身近な問題として考えられる記事を選んだと明かした。西堀記者は取材にあたって、「東京での政治的な決断について、まずは現場の声を聞くことが大切だと思った」と語った。記事を通して読者に思いが届くのか、記者は不安を抱えているものだとした上で、「大作さんにはきちんと伝わり、消費者としてできることまで考えてくれた」と喜んだ。

また、大作さんから、どんな時にやりがいを感じるかと聞かれた西堀記者は「思いが届けた



大作さん（左）と西堀記者

いと思つて書いた記事をきっかけに、物事がよい方向に動くことがある。そんな時はうれし」と語った。

突然の死別 リアルに捉える

埼玉県立川越女子高等学校1年、石川真帆^{いしかわまほ}さんは、くも膜下出血で倒れた妹の臓器提供を決断した女性の記事を読んだ。身近な人の突然の死を受け入れられない状況下での決断の難しさを感じた。母との対話から、大切な人を突然失う苦しみを想像し、臓器提供の可否を考えられるのも、自分も周りも元氣だからこそであり、その幸せをかみしめたいとの思いに至った。臓



石川さん（左）と河合記者

器提供者と家族、それぞれの立場から多面的に記事を読み、身近な人と過ごす時間の大切さまで深く思考を掘り下げた。

朝日新聞社連載「喪の旅」を担当する河合真美^{かわけまみ}江記者（大阪本社文化部）との対談で、石川さんは「中学生時代の友人の話

から、移植は知識としてあった。自分の臓器提供に抵抗はないが、昨日まで元気で『またね』とあいさつした人の臓器を提供するかどうかの判断をする立場になったら、すぐに結論を出せそうもない」と語った。3年前に身近な人を相次いで亡くしたという河合記者は、死別をリアルに感じる石川さんの思いをしっかりと受けとめ、今後も記事を書いていくと誓った。

最優秀賞ならびに優秀賞受賞者の作品の全文など第14回の結果は、NIEウェブサイトで(<https://nie.jp/month/contest-newspaper/2023/>)に掲載している。

優秀学校賞受賞校

(15校)

- 岩手県 軽米町立晴山小学校
- 東京都 北区立東十条小学校
- 岐阜県 瑞浪市立陶小学校
- 佐賀県 嬉野市立久間小学校
- 長崎県 聖マリア学院小学校
- 秋田県 横手市立横手明峰中学校
- 埼玉県 吉川市立吉川中学校
- 東京都 都立桜修館中等教育学校
- 福井県 越前町立織田中学校
- 福岡県 北九州市立枝光台中学校
- 北海道 北海道富良野高等学校
- 宮城県 宮城県一迫商業高等学校
- 東京都 都立清瀬高等学校
- 神奈川県 神奈川県立新羽高等学校
- 福岡県 福岡県立鞍手高等学校

第15回コンクール募集中!

第15回「いっしょに読もう!新聞コンクール」の募集を始めました。対象は小・中・高校(高専)生です。学校全体でぜひ取り組んでみてください。詳しくはNIEウェブサイト(<https://nie.jp/month/contest-newspaper/2024/>)をご覧ください。締め切りは24年9月9日(必着)です。

新聞の「今」

新聞は今も、過去の日本の戦争について様々な切り口で精力的に報じている。戦争体験者がいなくなってしまう時代を見据え、新聞人としてどのような思いで取材・報道しているのか。沖縄を拠点に活動する記者に寄稿いただいた。

体験者なき時代の戦争報道



毎日新聞西部本社
編集局写真部兼那覇支局
喜屋武真之介

終戦から78年。戦争は日本に住む多くの人にとって、もはや身近なものではなくなった。戦争体験者の多くは亡くなり、かつてこの国であった戦争の面影を日常生活の中で感じる機会はほとんどないだろう。その一方で、昨今はニュースに触れれば道に限らず、SNSなどで現地の住民たちから直接発信されるガザやウクライナの現状を見て、戦争の恐ろしさを感じている人は多いと思う。ではなぜ、あえて「過去の戦争」を学ぶ必要が

あるのだろうか。

今年度の新聞協会賞を受賞した作品（写真）は、太平洋戦争末期に沖縄本島の西約30キロに位置する渡嘉敷島で起きた、いわゆる「集団自決」がテーマだ。渡嘉敷島では米軍の上陸後に山中に逃げ込んだ多くの住民が自ら死を選んだり、家族の手にかかって殺されたりした。その犠牲者は300人を超える。

子供の視座は社会の鏡

取材でたどり着いた生存者の男性の1人は、父親に木の棒で殴り殺されかけた時の頭の傷が生々しく残っていた。今も頭部には細かい骨片が残り、枕に血がにじむこともあるという。男性は米軍に救出されて奇跡的に

生き延びたが、両親は集団自決で犠牲に。目立つ傷を負ったその後の人生は、同級生にからかわれ、仕事も思うように選べず「惨めだったよ」と涙を流す。今でも傷を隠すため、外出時は帽子を欠かせない。

一方で、集団自決の現場にいた時の心境は「死ぬのは当然だ」と思っていた」と振り返る。当時わずか10歳の少年は、母親らが父親に殴り殺される様子を目の当たりにしながら、自分が殺される順番を静かに座して待っていたという。

この男性だけではない。犠牲者の多くは10代以下の子供たちで、恐怖を押し殺し、死を受け入れることこそが「正しい」と信じていた。米軍への恐怖も



毎日新聞2023年4月22日付夕刊から
(毎日新聞社提供)

ちろんあったが、天皇のために命を捧げ、捕虜になることは恥だと教え込んでいた当時の教育や報道が、純粋で素直な子供たちを死に向かわせたことを忘れてはならない。

今も存命の戦争体験者のほとんどは当時子供だった世代で、戦後70年が過ぎて初めて胸に秘めていた戦争体験を打ち明けた人もいる。それは年々語り部が減っていくことへの危機感もちろん、当時まだ子供だったことによる上の世代への「遠慮」のようなものもあったと語る人もいた。しかし、社会の鏡である子供の視座は、大人以上に示唆に富んでおり、当時の社会を知る上で欠かせないものだ。

子供たちよ、思考を止めるな

海外の戦争に関する報道でも明らかのように、大人が始めた戦争によって多くの子供たちが心身ともに傷つき、命を落とすていく。だからこそ、平時の日本に生きる今の子供たちは戦争報道を見聞きした時、「怖い」「かわいそう」で思考を止める

ことなく、歴史や社会、思想など、その戦争の背景にまで思いをはせ、「自分事」として考える力を養ってほしい。

それは過去の戦争と接する時も同じだ。体験者の語りは「戦争がもたらす悲劇」だけでなく「戦争をもたらす社会」がどのようなものだったのかを教えてくれる。それは決して現在と分断された過去ではなく、同じ日本で起こった地続きの過去だ。和を乱す者を攻撃する同調圧力の強さや、子を親の所有物のようにみなす家族観など、集団自決につながった社会の価値観は今も根強く残っている。

戦争当時を知る世代から話を聞ける時間は残り少ない。「戦後80年」などの節目にこだわることなく、まだ埋もれている記憶を一つでも多く未来へ残していくことは報道の大きな役割だが、近い将来訪れる「戦争体験者なき社会」が新たな戦争を招かないために、何をどう伝えていくべきなのか。戦争報道が過渡期にある今、試行錯誤しながら考えていきたい。

NIEアドバイザー紹介

- ①学校名(所属等)
- ②担当教科 ③NIE 実践歴
- ④新聞を活用するうえでの工夫を一言(敬称略)



●神奈川県
副島 江理子
(そえじま・えりこ)
①横浜市立本町小学校、十文字学園女子大学
②全科・学習指導・学校図書館 ③12年 ④新聞を学校図書館に配架し、学校司書と連携することで、全校児童に新聞に興味をもたせたり、教科学習で活用したりする。



●新潟県
小池 満喜子
(こいけ・まきこ)
①新潟県下越教育事務所
②小学校全科 ③2年
④新聞との出会いを楽しく価値あるものにする。多様な視点から物事を捉え、思考する力の育成を目指し、自己の成長を実感させる。



●滋賀県
三木 由美子
(みき・ゆみこ)
①滋賀県立水口東高等学校
②国語 ③10年
④「まわし読み新聞」や「いっしょに読もう!新聞コンクール」等を積極的に利用している。NIEには知恵の蓄積がある。



●高知県
宮本 教子
(みやもと・のりこ)
①四万十市立西土佐中学校
②国語 ③15年
④新聞を読んで考えたこと等について、必ず他者と交流し、多様な考え方に接する機会を設ける。



●宮崎県
福島 和馬
(ふくしま・かずま)
①日南市立油津小学校
②全科 ③4年
④読解力を高める取り組みを実践中。新聞活用で音読力、語彙力、要約力を高め、成果、エビデンスもそろった。さらなる工夫をしていきたい。



●宮崎県
鬼塚 拓
(おにつか・たく)
①宮崎市立宮崎中学校
②社会・総合 ③3年
④新聞の読み手としての情報消費者から、新聞作りを通じた情報生産者になるための方法を学んでいくことに重点を置いている。



●宮崎県
門松 直子
(かどまつ・なおこ)
①西都市立穂北中学校
②国語 ③3年
④地元紙に月1回、感想文を投稿している。全校生徒一人一人の感想、体験を知ることができて、楽しい。



●宮崎県
宮本 朝美
(みやもと・あさみ)
①宮崎県教育庁義務教育課
②国語 ③3年
④子供の興味や関心に合わせた自由な閲覧と、指導のねらいに応じた意図的な提供を組み合わせることで効果的に活用していきたい。

NIE フラッシュニュース

◇第29回全国大会京都大会の概要決まる 第31回は広島で開催

「探究と対話を深めるNIE デジタル・多様性社会の学びに生かす」をスローガンに、本年8月1、2の両日、京都市で第29回NIE全国大会を開催します。

初日はロームシアター京都でテーマに沿ったパネルディスカッションの他、歴史家の磯田道史さんによる基調講演が行われます。2日目は、京都経済センターで京都府内の小・中・高校・ろう学校による公開授業・実践報告などを予定する他、「子ども新聞、子ども記者活動」「京都のNIE史」をテーマに特別分科会を実施します。また、「ポスターセッション」のコーナーを設け、NIE活動・学習に取り組む学校などからポスター形式で作品や発表を掲示する予定です。詳細はNIEウェブサイトに(<https://nie.jp/conference/>)をご覧ください。

第31回NIE全国大会は2026年に広島市で開催します。広島での

開催は第2回大会(1997年)以来、2回目です。2025年の第30回は神戸市で開催します。

◇学校図書館テーマにNIE教育フォーラム開催迫る

2月23日、「学校図書館とNIE」をテーマに、第7回NIE教育フォーラムをオンライン(Zoom)で開催します。大正大学教授で同大学附属図書館長の稲井達也さん、元小学校長でNIEアドバイザーの副島江理子さん、区内の公立全小中学校への新聞配備を始めた東京都葛飾区教育委員会の入山達也さん、新聞協会・関口修司NIEコーディネーター(司会)によるパネルディスカッションを行います。参加申し込みはNIEウェブサイト(<https://nie.jp/forum/>)まで。

◇動画「NIEはじめての1歩」公開中
新聞協会は、これからNIEを始める先生に向けた動画を公開しています(<https://nie.jp/teacher/>)。メディアリテラシー編ほか、新聞活用の具体的な実践例などを紹介する全6編。ほかに、政治編を準備中です。ぜひご覧ください。



本校では2021年度より2年間、NIE実践指定校の委嘱を受け、「新聞を活用すること」で、社会に対する視野を広げる生徒を育成すること」をねらいに取り組みを進めた。その取り組みの柱としたのが、「新聞に親しむ」「新聞を活用して学力を高める」の二つである。そして、この基盤と考えたのが、全校生徒が新聞に親しむ機会をもつこと、全教員が新聞を活用した授業を行うことである。

「親しむ」では、15の通常学級全てに新聞を配布し、学級で今日の注目記事のスクラップや

事務局長から一言

小千谷中学校のNIE実践の特徴の一つは、生徒も職員も手軽に新聞に触れる環境を充実させ、授業改善していることだ。

短学活での紹介など、全生徒が新聞に触れる機会を設定した。「親しむ」から「高める」へ発展することを意図して行ったのが、「Weekly-NIE活動」である。この活動は、週1回、朝

読書の時間に、教員が選んだ記事を生徒のタブレットに配信し、ワークシートに自分の意見等を書かせるものである(写真上)。各学級のワークシートは生徒会の学習委員が回収し、各学級1

小千谷市立小千谷中学校

教諭 井上 北斗

◎新潟県小千谷市／校長・若林 靖人／生徒数・472人
◎特色・信濃川により形成され、錦鯉発祥の地である小千谷市。本校は市の中心に位置し、「互いに励まし合い、みんなが精いっぱい力を伸ばす」を学校教育目標に掲げ、教育活動を進めている。部活動や生徒会活動が盛んで、「地域とともに歩む」「笑顔」と「希望」あふれる「学校」を目指し、地域コミュニティ活動にも力を入れている。



タブレットでWeekly-NIEに取り組む生徒



職員研修で記事データベースを利用する教員

若林校長は学校に新聞を配備するだけでは不十分だとし、「全学級への新聞配備」を決めた。PTAが予算を全面支援した。

開するために、教材開発のツールとして「新聞記事データベース」を導入し、校内研修を推進した。結果、生徒は進んで新聞

研究主任の井上教諭は、すべての教職員がよりよい授業を展

自分の見方・考え方を広げたり

枚を選んで掲示した。他の生徒の文章を読んだり、自分の考えと比較したりすることで、文書を読む力や思考力・判断力を駆使する姿が見られた。

「高める」の中核となるのが、授業である。授業を構想する上で、「欲しい記事が必要な時に入手しにくい」という声が教員から上がった。そこで、新聞社の記事検索データベースを契約し、キーワード検索等で記事を手取りできる体制を整えた(写真下)。これにより、複数の記事の比較や、関連性のある記事を探すことが容易になり、教材研究や授業での効果的な記事活用ができるようになった。

実践指定校の期間は終わったが、新聞活用を継続し、社会への視野を広げるために、生徒の資質・能力を育んでいきたい。

して学びを豊かなものにした。今求められているGIGAスクール構想や働き方改革に合致した新たなNIEと言えよう。

(新潟県NIE推進協議会事務局長・津野庄一郎)



徳島県は、新聞を読んでいる小中学生の割合が全国トップクラスだ。全国学力・学習状況調査の結果から分かる。少し前までは低迷していたのに、なぜ。答えは簡単。2020年から徳島新聞の子ども新聞「阿波っ子タイムズ」が学校へ配布されるようになったから、である。それをめくって読むかどうかは別にして、徳島県の小中学生は毎週学校で配布される新聞を目にしている。先生方には配布の手間をかけることになるが、新聞を直接子どもたちに届けるという意味では優れたシステムだ。だが、これがデジタルになるとどうなるだろう。配信された新聞を見るには自動的にデジタル端末を操作しなければならない。そうすると新聞を読む子どもの割合は確実に減るだろう。紙かデジタルか。教育現場も新聞業界も今、同じ難問に直面している。

(徳島新聞社・笠井由紀)